

まず私というもの―医師になる前の心構えを問う

これから医師を目指す受験生と現役医大生の君たちに知っておいてもらいたいことを述べていく。しかしその前に、私というものがどのような人物であるか、少し自己紹介をしておく。

埼玉の田舎で生まれ育ち、普通の公立高校から一九八七年に医学部合格を果たした。医学部といっても東京大学や慶應義塾大学のような偏差値の高い大学ではなく、北関東に位置する私立のどちらかといえば低いほうに属する新設医大であった。

「何だ」と思ってもいいが、数ある医学部の中で、むしろエリートの集う医学部でない私のほうが、人間らしさや率直な想いを伝えることができるのではないかと自負している。優秀すぎる人間の考えと一般人との間には、ギャップがあると思うからである。だから、どちらかと言えば本書は、成績はそこそこ、「高校時代は随分遊んでしまったな」と思う連中にとって参考になるのではないかと考えている。

医学部の学生時代は特に目立つこともなく、ごく普通の生活を送っていた。軽音楽部に所属し、楽器にチャレンジするも趣味の域を脱するほどの腕を磨くこともなく、淡々と勉強をこなし六年間で無事に卒業した。医師国家試験なんてものは所詮、資格試験であるということを手早々に理解

し、そつなく勉強をこなし、合格に至る点数を軽くクリアした。晴れて医師免許を取得したのが一九九三年であった。

そう言う、「どこが人間らしいのだ」と思いかもしれないが、受験勉強を乗り越えて医学部に合格できるような奴だったら、勉強面だけを考えれば医師国家試験なんてものは大して問題にはならない。その理由は第二章の「医学部の勉強は難しいのか？」で後述するが、そういうものである。

卒業と同時に同大学の「神経内科」へ入局した。当時の制度は卒業と同時に特定の科に属し、すぐに専門的な診療をこなさなければならなかった。この科は、脳や神経を診る内科であり、脳卒中やパーキンソン病、アルツハイマー病などを専門とする診療科である。以来、神経内科医として、一般診療の傍ら免疫性末梢神経疾患（アレルギー機序に基づく神経病）の病態と治療に関する研究に従事してきた。二年半、研究を目的にイギリスのグラスゴー大学に留学し、帰国後も母校において診療を続けている。最近は、「医局長」などという肩書きをいただき、神経内科を取りまとめる課長補佐のような仕事を任されている。

現在、医師一五年目になろうとしている。冒頭でも述べたが、私には医師になりたい確固たる動機はなかった。しかし、今はもちろん後悔はしていない。周りの同僚に医師になった動機を尋

ねると、小さい頃に重い病を患ったことや親族の死を体験したことなどを理由にするものが多いが、医師志望者が波乱万丈な人生を送っている必要などない。もちろん、強い動機のある医師を否定するわけではないが、普通の人間が普通の感性で普通に医師になり、常識的な診療を続けられれば、まずはそれでいいのである。高い理想を掲げるものほど途中の挫折が多く、医師に向かないという傾向もあるように感じるからである。

医療なんてものは美談に溢れている世界ではない。理想と現実とのギャップを必ず体験する現場なのである。だから、医師になった理由より、医師になりたい一念と、そのためにフレキシブルに自分を変えていくことのできる感性のほうが余程重要である。志望動機はどうであれ、医師になった後の研修を真面目に素直に過ごせば、自然と医師の資質に目覚め、人格が形成され、それなりに使える医師になるのである。

ここまで述べてきて気付いたが、私は医師として極めて普通のコースを歩んできた、ただの勤務医のようである。そんなどこにでもいるような医師が、なぜ大胆不敵にも本を執筆したいと考えているのか。なぜ医療の現状を問い続けたいと考えているのか、諸君にはそのような思いも本書から感じ取ってもらいたい。

とりあえずの結論を言うと、東大を出ようが慶応を出ようが、多くの医師は世界的な名医にな

れるわけではないし、一流の研究者になれるわけでもない（一部にはもちろんいるが）。医師になればバラ色の人生が待っているなどと幻想を抱くものではない。はつきり言っておくが、大半の医師は社会福祉を支える歯車として働くだけである。病める人のために身を磨り減らし、一生を終えるだけである。もちろんそれを否定しているわけではない。私もその一人である。

でも、だからと言って、けっして退屈な公僕というわけではない。医師になることの最大のメリットをひとつあげると問われれば、私は、「自分の持ち味を生かすことで、人生の可能性を最大に広げられる職種である」と答える。

一旦医師になれば、東大理Ⅲに入った日本一頭の良い連中たちと同じ職種を得るということである。同じ仕事に就くのだから、学歴だけで決まるというものではない。東大に入れなかつたからといって、へこむ必要はまったくない。医師になれば人生の挽回はいくらでもきく。特にこれからの医師にとっては、出身大学なんでものは関係ない。だから、入学できる医学部であればどこでもいい。要はそこで何を学び、何を求めていくかである。

伝統的な偏差値の高い大学には、いい講師が揃っているかもしれない。教育のレベルも高いかもしれない。卒業生が各界で幅を利かせていれば人脈が広がるかもしれない。それは否定しない。だから、少しでも高い偏差値の大学を目指したい気持ちに誤りはない。その願いが努力の原動力につながるのであればそれもいい。しかし、良い大学を出ればそれで将来が約束されるかといえ

ば、けっしてそんなことはない。良い大学に入学できたことで満足してしまう人生ほど意味のない人生はない。

私の経験から言わせてもらえば、たとえば学会で発表する際に出身大学で評価が変わるということは基本的にはない。特に海外に出れば出身大学なんか屁のつつぱりにもならない。個人が勝負である。外国人からは、「東京」と「獨協」の発音が似ているので、しばしば混同される。「トウキョウダイガク」も「ドッキョウダイガク」も所詮は同じである。

ただ、言っておくが、だからと言って、「医師はやる気と人格で評価されるべきだ」と息巻いたとしても、それは青臭い医学生の考えである。良い人ぶって表向き、そう言っていたとしても、中身がなければ三流私立医大を正当化しているように思われるだけである。極端かもしれないが、「患者に優しくしてあげたい、困っている人を助けたい」と声を大にして言っている医師に限って、医師としてのレベルが低い。私立医大に勤める私のようなものが発言したかったら、自分の時間のすべてを医療に費やし、診療に関しては一点の妥協も許さず、そのうえで物を言うしかない。

自己紹介から話が反れてしまったが、私は医師になってからというものの、そのほとんどの時間を大病院で過ごしてきた。大学という組織の中で社会について学び、多くの人と関わり合いながら修練を重ねてきた。多くの患者を診療し、私はこれまでに邦文と英文とを合わせて二〇〇本